

2. 「高大接続を目指す『キャリア教育』

－『ボランティア』から『サービス・ラーニング』そして『インターンシップ』へ－

愛知東邦大学教育学部教授・教育学部長、名古屋大学名誉教授

今津 孝次郎

はじめに

私の専門は教育社会学、学校臨床社会学、そして発達社会学です。これら3つの観点から「高大接続を目指す『キャリア教育』－『ボランティア』から『サービス・ラーニング』そして『インターンシップ』へ－」についてお話をします。

「キャリア」という言葉は、カタカナ書きで日本語としてよく使われており、また「キャリア教育」という用語も、例えば2020年から始まる新しい学習指導要領の中でも非常に重要視されています。「進路指導論」ともいい、(キャリア教育を含む)とカッコ書きされています。このように「キャリア」、あるいは「キャリア教育」という言葉は一般的にも、また学校教育の分野でも広く使われていますが、この「キャリア」「キャリア教育」とは一体どういう意味なのか、その意味を整理することから始めます。

1. 「キャリア」と「キャリア教育」の意味

1. 「キャリア」と「キャリア教育」の意味

(1) Careerの語義：ラテン語 carraria(＝車道)に由来し、競争するための道、の意から多様な用法が派生した。今でもcareer about(＝全速力で走りまわる)のように使われる。

〔A 広義〕 人生、経歴、履歴

〔B 狭義〕 職業、専門職

〔C 最狭義〕 成功、出世、職階上位

(2) キャリア教育の二つの意味

① 主に〔A 広義〕に基づき、人生のさまざまな生き方を知り、自分の将来展望を描きながら検討する。

② 主に〔B 狭義〕に基づき、さまざまな職業について知り、自分の将来の職業選択を描きながら検討する。

以上二つの意味のうち、ほとんど②の意味で使われている。

ただし、①②のいずれであれ、「個人の歩み」に着目しがちで、個人を取り巻く集団・組織の視点から「社会の一員となるプロセス」は見落としがちである。

(1) Careerの言葉の意味

まず「キャリア」という言葉の本来の意味ですが、ラテン語のcarraria(＝車道)に由来し、“馬車が通る道、競争するための道”という意味で、そこから多様な用法が派生しています。今でもcareer about(＝全速力で走りまわる、疾走する)という意味で使われる場合もありますが、それが今日ではどちらかというと“職業”や“職業選択”といった意味に集中して用いられていることが多いです。そこで広い意味(広義)から狭い意味(狭義)へと、「キャリア」の3つの意味を整理しておきます。

まず広義では「人生、経歴、履歴」という意味があります。先ほど触れた“車が通る道”“馬車が通る道”が、“人が歩む道”という意味に派生し、「人生、経歴、履歴」といった広い意味で使わ

れます。2つ目に少し狭い意味では、今日よく使われている「職業、専門職」という意味があります。そしてもっと狭い意味（最狭義）では「成功、出世、職階上位」という意味で使われます。例えば“キャリア官僚”という言葉もそうですし、“あの人はキャリア組みだ”というような言い方をするのは、どちらかというと“職業の道で成功した”“出世した”といった意味、つまり最狭義の意味で使われています。

(2) 「キャリア教育」の意味

さて、それでは「キャリア教育」の意味はどういうものなのでしょうか。これは2つにまとめられると思います。ひとつは主に広い意味（広義）に基づき、「①人生のさまざまな生き方を知り、自分の将来展望を描きながら検討すること」です。それが「キャリア教育」の意味のひとつだと思います。もうひとつは狭い意味（狭義）に基づき、「②さまざまな職業について知り、自分の将来の職業選択を描きながら検討する」ということです。この「キャリア教育」の2つの意味のうち、どちらかという2つ目の狭い意味である「②さまざまな職業について知り、自分の将来の職業選択を描きながら検討する」のほうが、主に使われているのではないかと思います。

以上の2つの意味のうち、ほとんどの場合は②の狭義に基づく意味で使われていますが、ここで指摘したいのはどちらの意味であっても、「個人の歩み」だけに着目しがちで、「個人の歩み」を取り巻く集団や組織の観点からのキャリアに伴う重要な側面として、「社会の一員となるプロセス」が見落とされているのではないかということです。

そこで「社会の一員となるプロセス」について、改めて眺めてみたいと思います。このプロセスこそが青少年の成長発達、そして高大接続の諸課題にとって重要な一環になるのでしょうか。「個人の歩み」そのものだけに注目するのではなく、むしろその個人を取り巻く集団や組織の観点から、青少年が社会の一員となる大きなプロセスを見落とさずに注目していくべきだと考えます。

2. 社会の一員となるプロセス

2. 社会の一員となるプロセス

- (1) 青少年の社会性の発達: 人間の共同生活を理解し、そこに「参加」できる態度と諸能力を学習すること。この学習を積み重ねることによって、社会の一員となる準備が整う。職業選択もその一環。
- (2) 参加の意味: 「参加」とは、集団や組織の諸活動に積極的に関わって、個人の意志を反映させ、連帯を達成するとともに、集団や組織に貢献すること。
- (3) 「参加」の諸段階: 「自発性」の低次から高次へ
 - ① 所属: 集団・組織のメンバーとして単に「いる」状態
 - ② 帰属: 「自分のもの」として意識している状態
 - ③ 活動: 役割を遂行し、一員として何かを「おこなう」状態
 - ④ 社会場面への関与: 集団・組織内に止まらず、広く社会状況に目を向けて、「社会に関わる」状態

(1) 青少年の社会性の発達

「社会の一員となるプロセス」とは、青少年がその社会性を発達させていくということです。

人間が人間である特性はいうまでもなく「共同生活」を送ることでありますが、この基本的な「共同生活」を理解し、その共同生活に「参加」できる態度と諸能力を学習することが重要です。そしてこの「参加」に関する学習を積み重ねることによって、社会の一員となる準備が整います。また職業選択も社会の一員となる一環であるということを見落とすべきではありません。

(2) 「参加」の意味

そうすると「参加」の意味は、集団や組織の諸活動に積極的に関わり、個人の意思を反映させて他者との連帯を達成するとともに、集団や組織に貢献するという点であるといえます。ここで留意すべきことは、この「参加」という営みは幾つかの段階を経て発展を遂げるという点です。この発展の段階を4つの段階で区分してみましょう。

(3) 「参加」の諸段階

まず1番目は「所属」の段階です。青少年が自発性の低い段階から自発性の高い段階へと成長発達を遂げていくと考えると、まず最も自発性が低い段階は「所属」の段階です。つまり集団や組織のメンバーとして、単にそこに「いる」という状態です。例えば家族の一員である、あるいは学校のクラスのメンバーであるといったように“ある特定の家族に所属している”“ある学校のクラスに所属している”、つまり「いる」という段階です。

それが少し自発性の度合いが高まると、2番目の「帰属」という段階に至ります。これは「自分のもの」として意識している状態のことです。例えば“これが自分の家族である”といった意識、あるいは“これが自分の学校のクラスであり、私はこのクラスの一員である”といった意識、つまり「自分のもの」だという意識が高まっていきます。これは「所属」ではなく「帰属」の段階です。このように自発性が少し高まると2番目の段階に至ります。

さらに3番目は「活動」の段階です。役割を遂行して集団や組織の一員として何かを「行う」といった状態のことをいいます。例えば“家族の一員として家事の手伝いをする”、あるいは“学校のクラスの委員を自分が担い、クラスの活動に参加していく”という、つまり「行う」という状態が3番目の「活動」の段階であるということが出来ます。

最後の4番目は「社会場面への関与」の段階で、これがいちばん自発性の高いレベルです。集団や組織内に留まらず、外の広い社会状況に目を向けて「社会と関わる」状態をいいます。1番目から2番目、2番目から3番目、3番目から4番目というように、参加の度合いが強まっていく、つまり個人の自発性の度合いが徐々に強くなっていき、そして最後の4番目の段階の「社会に関わる」状態に至ったときに、実は「ボランティア」という活動とびつたりと結びついてくると整理することができるのです。

3. ボランティアの意味と意義

3. ボランティアの意味と意義

(1) Volunteerの語義：本来は「自発的の志願」の意で、有償・無償を問わない。したがって、犠牲的奉仕精神をもった慈善活動という、これまでのイメージは特殊で偏ったもの。

(2) ボランティアの性質：

①高次「自発性」による「参加」レベル④「社会場面への関与」の具体的行動に当たる。青少年にとって「社会の一員となる」プロセスで重要であり、「市民性」教育の基礎ともなるので、最初はやや強制的な機会提供が求められることもある。建国の歴史的背景からボランティアが根付いたはずのアメリカでも、近年は青少年のボランティア活動が低下していることから、高校教育に必要な「ボランティア時間」が1980年代にあえて提起されたことがあった。

②福祉分野に限らず、特別の能力が無くても、あらゆる生活分野で可能。

③単なる行政の手伝いでは無く、地域の共同生活を自ら創り出す積極的行動。

(1) Volunteerの言葉の意味

それでは参加の度合いが最も強く、そして社会全体に関わる具体的な活動である「ボランティア」の意味と意義について検討してみましょう。

まずVolunteer（ボランティア）の本来の意味は、「自発的な志願」であり、実は有償・無償を問いません。ボランティアというと無償、つまり特に利益はないが社会に関わる活動というように理解されている向きが大きいです。有償であってもいいのです。一番重要なことは“自発的の志願であるということ”であり、これが最大のポイントです。したがって“無償の犠牲的奉仕精神をもった慈善活動”というような、これまでのイメージはかなり特殊であり、少し偏った理解であるといえるのではないのでしょうか。もちろん今日ではそういった偏った理解をされることも少なくなり、特殊な用法は弱まってきているように思います。「ボランティア」という言葉は、「有償・無償を問わずに、自発的の志願でいろんな活動に関わって社会に参加していく」という意味で、日常的に使われるようになっていきます。その自発性の高いレベルでさらに考えてみると、「ボランティア」の性質として3つほど特徴を指摘することができます。

(2) ボランティアの性質

1つ目ですが、先ほど自発性の最も高いレベルが「社会場面への関与」であり、その具体的行動が「ボランティア」になると述べましたが、青少年にとってボランティア活動は社会の一員となるプロセスとして非常に重要であり、「市民性citizenship教育」の基礎となります。そうすると、自発性ということに少し反しますが、最初はやや強制的な機会の提供が求められることもあります。例えば、ボランティアの世界を知らない中学生・高校生の段階では、「街の掃除をしましょう」や「福祉施設に少し参加してみましょう」というように、学校側が無理やりボランティアの機会を提供します。学校の先生に声をかけられ、「いやいや」「仕方なし」に参加するということがあるかもしれませんが、そのことによりボランティアの世界が少しずつ分かってくるとともに、青少年たちも少しずつ自発性の気持ちが湧いてくるのではないかと思います。そのようにしていかなないと「市民性citizenship教育」も具体的には実現できないのではないのでしょうか。ボランティアの最初のきっかけが、やや強制的なものであったとしても、それによってボランティアの世界、

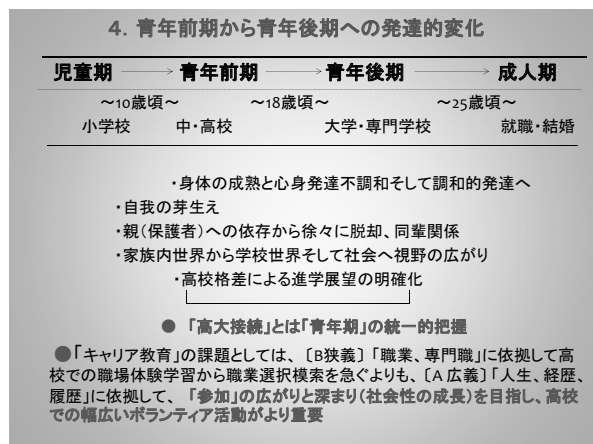
あるいはボランティアの面白いというものが分かってくると、中学生・高校生たちも徐々にボランティア活動に積極的に参加していくようになるのではないかと予想することができます。建国の歴史的背景からボランティアが根付いているはずのアメリカでも、近年は青少年のボランティア活動が低下しているようで、高校生教育に必要な「ボランティア時間」というものが1980年代頃にあえて提起されたことがありました。最初から子ども達がボランティアに自発的に参加するのはなかなか難しいことですので、大人の側、先生の側、親の側がボランティアの機会を提供して、徐々にボランティアの世界を知ってもらおうというプロセスが必要だと思えます。これが1つ目の性質です。

2つ目は、ボランティアで関わる活動内容です。今まではどちらかというところ福祉分野に限って理解されがちでしたが、今日ではそれに限っていません。特別な能力がなくても、また福祉分野に限らなくても、あらゆる生活分野で可能な活動であるということが、ボランティアの性質として徐々に理解されてきています。

3つ目ですが、行政で行うべきことが十分できない場合、その行政の手伝いをするのがボランティアであるという捉え方がかつてありました。しかし今日では単なる行政の手伝いということではなく、それは地域の共同生活を自ら作り出す積極的な行動であり、それがボランティア活動であると理解されてきています。これにより社会参加の態度が生まれ、「市民性citizenship教育」の基礎が作られるのです。以上の3つがボランティアの性質として指摘できると思えます。

これまでキャリアの意味やボランティアの意味を確認してきました。次に青少年の発達段階について改めて検討していきます。

4. 青年前期から青年後期への発達の变化



(1) 青年前・後期

従来は「思春期」という言葉がポピュラーでしたが、これはどちらかというところ身体の急速な成長・変化という意味で強調されてきました。今日では「思春期」という言葉は学術研究の場ではあまり使われなくなっており、身体の変化だけではなく心の変化や社会性の変化など、この時期の青少年に起きる変化を広くとらえ、一般的に「青年前期」といわれるようになりました。それ

に「青年後期」が付け加えられ、合わせて「青年期」としてとらえられています。年齢でいうと小学校4-5年生の10歳くらいから「青年前期」が始まり、高校3年生の18歳くらいに「青年後期」に移行します。そして大学生・専門学校生から就職して結婚時期に至る25歳くらいまでが「青年後期」といわれています。その後は「成人期」に入ります。非常に大ざっぱな区分ですが、このように目安をつけると考えやすいと思います。もちろんこれには個人差があります。早く成長する個人もいれば、遅れてしか成長できない個人もいます。大学院まで進学するというように、学校教育を長く続ける人もいれば、途中で学校を辞めて就職する人もいます。また25歳までに結婚する人もいれば、30歳くらいでないと結婚しない人も、あるいは結婚をしない人もいます。ここに挙げているのは、おおよその目安であり、こういった流れがあるということをご理解いただきたいと思います。

(2) 青年期の発達的特徴

そこで、この青年期の発達的な特徴を整理してみたいと思います。1つ目は、まず何といても「身体の成熟」です。この成熟の仕方が人生の中でも急速であるために、身体の発達と心の成長とが不調和、アンバランスをおこす、そういったことが起こりやすくなります。誰でも中学生の頃に典型的に生じる状態を経験されたことがあると思います。例えば自分で心をコントロールできない、あるいは身体の奥底から突き上げてくるような衝動を統制できないというような経験です。攻撃的になり、例えば学校では壁に穴を開けてみたり、机を傷つけてみたり、物を壊したりするような器物損壊（バンダリズム）の行動、あるいはいじめ、校内暴力というような行動例が特に青年前期の若者に見られる典型的なものです。また社会的ルールの習得が不十分なので、逸脱行動や非行に走ることも珍しくありません。中学生あたりが最も問題行動に走りやすいのは、青年前期の急速な成長の中で心身のアンバランスと社会的ルールの無さが原因なのです。これが高校1-2年生くらいになると、心身のバランスが取れ始めて落ち着いた状態、つまり調和的発達へと移行していきます。「身体の成熟と心身発達不調和から調和的発達へ」という流れがあることを指摘することができます。

2つ目に重要なのは「自我の芽生え」です。「自分」という意識が現れてきます。親ないし保護者への依存から徐々に脱して、同じ歳の仲間や友達といった同輩、あるいは異性に関心が移ってくるのがこの時期の特徴です。3つ目として、親の依存から抜け出すということと関係しますが、家族内の世界から学校の世界、そして社会へと視野が広がってくるということが指摘できます。

4つ目はさらに現実問題として、高校の格差の影響を受けた進学展望が明確化していきます。つまり進学したい大学や専門学校が現実の偏差値学力によって条件付けられていく、決められていくといった、ありのままの現実と直面していくことも、青年前期から青年後期の青少年たちが自分の進路を選んでいく上でどうしても見落とせない側面です。偏差値の高い高校があれば低い高校もあります。自分の意思と反するかもしれませんが、現実問題としてどこかの高校格差の中に位置付けられ、それによって大学進学、あるいは専門学校進学の道を決めざるを得ない仕組みがあるという現実と直面していきます。

(3) 「高大接続」の意味を問う

そこで「高大接続」を改めて考えてみたいと思います。「高大接続」とは、青年期の前期と後

期を含めて、青年期を統一的に把握するという他に他ならないわけですが、実際には中・高校と大学というように学校制度上分断されています。青年期を統一的に把握するべきであるにも関わらず、それを妨げている面がないかどうかを、常に検討する必要があるのではないかと思います。

学校制度から見ると中・高校と大学、あるいは専門学校というように、そこには溝、つまりギャップがあります。しかし個人に注目するならば、青年前期から青年後期は個人の成長としてのひとつのキャリアであり、人生の流れの中に置かれているのですから、それを中・高校と大学というように分けてしまうこと自体が不自然ではないかという意味で、「学校の段階を接続したい」というのは、「青年期を統一的に把握しよう」ということの別の表現ではないかと思います。そしてキャリア教育に結び付けて考えてみると、狭い意味の「職業、専門職」に依拠して、高校での職場体験学習から職業選択を模索することを急ぐよりも、広い意味の「人生、経歴、履歴」に依拠して、社会への参加の広がりや深まり、すなわち社会性の成長を目指し、高校では幅広いボランティア活動を行うほうがより重要なのではないかと思います。

学校にはさまざまなキャリア教育の現場がありますので、一概に言うのは語弊がありますが、一般的に高校のキャリア教育は、将来就きたい職業を一時的にでも予想し、それに向けて例えば専門学校を選択する、あるいは大学を選択する、つまりどの大学にするのかどの学部にするのか、どの専門学校にするのかを早く決めなさいといった、職業選択の模索が少し急がれているような雰囲気があるように感じています。しかし、そういう状態であるならば余計にキャリアの広い意味である「人生、経歴、履歴」に依拠し、その個人が将来どのように生きていくのかということをもっと広い観点から見つめなおしながら、職業選択についても考え始める、という程度でよいのではないかと私は考えています。学校、特に高校でのキャリア教育が実際どのようになっているのかを改めて検討しなおす必要があるのではないのでしょうか。

5. 大学初年次の「サービス・ラーニング」

5. 大学初年次の「サービス・ラーニング」

(1)「サービス・ラーニング」の意味

地域諸機関での奉仕活動(サービス)を通じての経験学習(ラーニング)。1990年代後半からアメリカの市民性(citizenship)教育として中等・高等教育で盛んになってきた実践活動。日本でも少しずつ広がりつつある用語。

(2)「サービス・ラーニング」の意義

「ボランティア」は自発的奉仕活動の意で、幅広い分野での「参加」そのものであるが、学習の意味合いが弱い。また、「インターンシップ」は具体的な就業経験の意で、特定分野での職業訓練に限られる。「サービス・ラーニング」は両者の中間に位置づく。

〔教員養成の分野〕

2020年からスタートする新教職課程では「学校インターンシップ」が登場するが、大学1-4年全学年を対象にするには、4年間の学生の成長発達プロセスを見落とした複雑な用法なので、初年次は「サービス・ラーニング」として位置づけるべき。

(1) 「サービス・ラーニング」の意味

最近日本でも使われるようになってきた言葉で「サービス・ラーニング」があります。“サー

ビス”は“地域諸機関での奉仕活動”のことであり、その“サービス”を通じての経験学習（ラーニング）ということから、「サービス・ラーニング」とは「地域諸機関での奉仕活動を通じての経験学習」という意味です。これはもともと1990年代後半のアメリカで作られた言葉です。アメリカの「市民性citizenship教育」として中等教育あるいは高等教育で盛んになってきている実践活動であり、アメリカではこの「サービス・ラーニング」がすっかり根を下ろしています。日本でも少しずつ広がりつつある言葉です。そこで「サービス・ラーニング」の言葉の意義を、さらに掘り下げて考えていきたいと思います。

(2) 「サービス・ラーニング」の意義

先ほどボランティアについて触れました。それから後ほどインターンシップについて触れたいと思いますが、ボランティアとは「自発的奉仕活動」の意味で、幅広い分野での参加そのものですが、学習的な意味合いが少し弱いのではないかと思います。社会参加することがボランティアですが、そこから経験的に何を学ぶかというところまではあまり突っ込んで考えません。それからインターンシップは「具体的な就業経験」の意味であり、特定分野での職業訓練に限られています。今日、企業はインターンシップを非常に重視しており、大学生たちはインターンシップの活動に積極的に参加しています。「サービス・ラーニング」は「ボランティア」と「インターンシップ」のちょうど中間に位置付く活動、あるいは考え方、あるいは課題というように考えていいのではないかと思います。これについて、教員養成の分野でさらに考えてみましょう。

2020年からスタートする新しい教職課程では「学校インターンシップ」が登場しています。文部科学省はこれをかなり重視しているようで、当初「学校インターンシップ」を必修にしようという意見までも出されましたが、そうすると現場でそれを受け入れるのはなかなか難しいということで、選択科目に押さえられました。その「学校インターンシップ」は大学1年生から4年生までの全学年を対象にしています。私はこれが少し解せません。なぜなら、大学1年生から4年生までの学生の成長発達プロセスを見落とすまま、ただインターンシップという言葉を手易にあてはめるといって、非常に乱雑な用法でないかと不満を持っているからです。大学4年間の学生の成長発達プロセスを考えるならば、自分の進路をあれこれ考えるきっかけは、初年次は「学校インターンシップ」ではなく、地域諸機関での幅広い奉仕活動を通じた経験学習、つまり「サービス・ラーニング」にするべきでないかと考えています。

(3) 愛知東邦大学教育学部の1年生「サービス・ラーニング」の試み

現在の勤務先である愛知東邦大学教育学部の1年生が「サービス・ラーニング」に取り組むようになって今年で4年目を迎えますが、具体的な事例としてこの取り組みをご紹介します。

(3) 愛知東邦大学教育学部1年生「サービス・ラーニング」の試み
—教育学部スタート(2014年度)の柱「サービス・ラーニング」開始の背景

- ・**大学内**: 座学が苦手な学生が多い。学習への動機づけが不可欠。身体を動かす活動は好む。若者一般に共通する特質として、少子化のなかで子どもとの触れ合いの機会が少なくなっている。豊かで便利な暮らしのなかで、生活力に欠けるケースが目立つ。
 - ・**大学外(地域の現場)**: 「子ども・教師・保護者のありのままの姿を知ってほしい、学校行事に人手が足りない」(近隣小学校長の“叫び”)
 - ・**教員養成**に絞り、「学習」面を強調する意味で、一般的な用語「学校ボランティア」に代えて「サービス・ラーニング」と表現 → 小学校だけでなく、幼稚園・保育所・児童館などへ広がる。
- ↓
- ・2年間の実験を経て、2016年度より**授業化**「サービス・ラーニング実習」(選択科目、前・後期各1単位、プレ教育実習の意義—勸奨科目)
 - ・サービス・ラーニング経験の結果、教職志望が強化されるケースがあれば、志望が動揺、あるいは弱体化するケースも→早期に進路変更の決断(スクリーニング)

(3) - 1. 「サービス・ラーニング」開始の背景

愛知東邦大学教育学部の歴史はまだ浅く、2014年度にスタートしてから今年で4年が経ち、やっと教育学部が完成するという段階を迎えています。学部を設置する際、どういうことを教育学部の特徴として打ち出すかということが学部内で議論され、「サービス・ラーニング」というものを試みようではないかと意見がまとまり、実験的に始まりました。

なぜ「サービス・ラーニング」に注目したかということ、まずは大学の中についてですが、座学が苦手な学生が多いということがありました。高校までの50分くらいの授業時間から90分という長い授業時間になり、そして一方的な講義を受けるという授業形体なので、じっと座って先生の話の話を聞き、そしてノートを取ることに苦慮する学生が多かったのです。そうすると“こういうことだから、今ここで座って先生の話の話を聞いて学ばないといけないのだ”という座学への動機付け、モチベーションがどうしても必要になってきます。モチベーションがないのに、「さあ座って講義を聞きなさい」「ノートを取りなさい」「半期ごとに試験がありますよ」というのはやはり難しく、それについてくることができない学生が出てきます。

ところが反対に、体を動かす活動を学生たちは大変好みます。そして、これは愛知東邦大学教育学部の学生だけではなく、今の若者に一般に共通する特質として、少子化の中で子どもとの触れ合いの機会が非常に少なくなっています。きょうだいの数が少なく、一人っ子も増えています。また地域では子どもの仲間集団が見られなくなっています。昔は学校が終わったらみんなカバンを放り出して、近所に行き、そして数人の子ども達が色んな勝手な遊びをしていました。時には悪さをするというのが、昔の子どもの世界でしたが、今はそういった街中の遊び仲間、仲間集団を見る機会が少なくなっていますし、赤ん坊と触れ合う機会も少なくなっています。そうすると教育学部の学生が将来幼稚園あるいは小学校で子ども達と触れ合う場合、子どもとどうやって触れ合ったらよいかかわからないということになりますので、早い時期から子どもと触れ合う機会を作ったらどうか、それならばむしろキャンパスの外でいろんな活動をさせたほうがよいのではないかと議論になりました。

さらに言えば、豊かで便利な暮らしの中で学生の生活力に欠けるケースが目立つようになっていきます。これも今の若者一般の特徴ではないかと思いますが、野外のキャンプでは作業をするだ

けの技術が身につけていないし、怖がって挑戦しようとしないうなど、生活力に欠けるというケースも出てきています。このように大学の中でいろんな課題を抱えた若者がいます。そして大学の外でも特徴があります。

教育学部をスタートする前の年に、愛知東邦大学がある名古屋市名東区の19の小学校をひと通り訪問して校長先生とお話した中で、先生方が共通して叫ばれたことがあります。「大学で若い学生たちに対して何を求めたらよいですか」と伺うと、「とにかく子ども、先生、保護者のありのままの姿を知ってほしい」ということでした。「大学の授業の中で教育原理や教育課程論を学んだり、学級経営を学んだりして知識や技術を学習するというのももちろん重要ですが、それとともに是非とも現場に来てください。今の子どもたちの実態を見て下さい。子ども達と関わっている教師のありのままを見て下さい。子どもの背後にいる保護者のありのままの姿を見て下さい。これが、学校が願っていることです」ということを、どの校長先生も言われました。私がふと思いついて「では学生に小学校の大きな学校行事のお手伝いをさせていただいたらどうでしょうか」とお尋ねしたところ、「それはありがたい。今学校行事に人手が足りません。少子化の中で先生の数が減っていますが、例えば運動会ひとつ取り上げても、保護者は運動会が盛り上がることを希望しているだけに、少ない先生で運動会を盛り上げるのが難しいのです。是非大学の学生諸君の力を借りたい」といった声がありました。

これらの大学の中と外に見られる特徴から、大学生の新1年生として入学してすぐにさまざまな現場に出かけて行き、子どものありのままの姿を見る、そして子どもに関わる先生の実際の姿を見る、そして学校行事に参加してお手伝いをするということが、実はキャンパス内の学習や座学への動機付けになるのではないかという気持ちが徐々に湧いてきました。こうして教育学部の新しい取り組みとして“大学初年次に「サービス・ラーニング」を取り入れる”というアイデアがまとまっていきました。

教員養成に絞って学習面を強調するという意味で、一般的な用語として使われている「学校ボランティア」という言葉は使わずに「サービス・ラーニング」と表現しました。地域諸機関は小学校だけではなく、幼稚園や保育所の場合もありますし、あるいは児童館、児童福祉施設などへも拡げることができます。職業を絞って必要な技術能力を現場で学ぶということよりも前に、地域の諸機関の現場を具体的に知ることで、自分のこれから進むべき進路について少しずつ学んでいくきっかけにしてもらったらどうだろうかということが、「サービス・ラーニング」のスタートになりました。これを実験的に2年間行ったところ、訪問してお手伝いをした学校側から好評を得ることができ、学生たちからも“大変良い経験になる”と好評を得たので、3年目である2016年度から授業化しました。「サービス・ラーニング実習」とし、選択科目にしました。前期1単位、後期1単位の合計2単位です。これを必修科目にするという手もありますが、必修にすると「このサービス・ラーニングを受けなければならない」「仕方が無い」「行きたくないけど行かなければならない」という態度の学生も中には出てくるかもしれません。そうすると、これは訪問する相手があつての活動なので、大変ご迷惑をおかけすることにもなります。やはりある程度気持ちのある学生たちに選択してもらい、そして現場に出てもらうというかたちをとりました。ただ、できれば全員に選択してほしい、つまり勸奨科目として春の新入生に対してガイダンスを行っています。なぜならば大学2年生から本格的に始まる教育実習の前段階、いってみれば「プレ教育

実習」という意義があるからです。

(3) - 2. 「サービス・ラーニング」 経験の結果

「サービス・ラーニング」の経験の結果として、ひとつ重要な点があります。実際に小学校あるいは幼稚園に行った学生を見ると、教職志望が強化されるケースもあれば、志望が揺らいだり、あるいは弱体化したりするケースがあります。強化されるケースは望ましいことですが、中にはごく少数ですが、「ヤル気を無くした」「教職への志望が低下していった」というケースも無いわけではありません。教職志望が弱体化した場合は大変問題です。個人的な面談を繰り返して、出来たら早い時期に進路変更の決断へともっていく助言を行うべきだと思います。これを「スクリーニング」と呼べるとは思いますが、教職への情熱があり教職の進路に向かってやっつけていける学生は問題ありませんが、入学を間違った、進路選択を間違ったというようなケースの場合は、転学部や転学科、または別に大学を入りなおすなどの道もあるのだということを、出来るだけ早い時期に助言する必要があります。これは「サービス・ラーニング」に隠された機能として、意欲ある学生とそうでない学生とを区別するスクリーニングだといえます。適性の判断という意味で、非常に重要なことでないかと思えます。あまり気持ちが乗っていないまま教育実習に出ると、実習校に迷惑をかけることになりすし、本人も非常に苦しむことになります。私たち教員の中では、スクリーニングということも念頭に置いて、学生ひとりひとりを見ていく必要があるのではないかと感じています。

(4) 「サービス・ラーニング」の具体的事例



具体例として、写真をお見せします。大学入学後約2ヶ月の5月末に、学生が「サービス・ラーニング」として近隣の小学校の春の運動会のお手伝いをした事例です。左上は用具係りとして、学校の先生の指示で運動場に用具を運んでいます。運動会の舞台裏のお手伝いです。また、右上は競技に入場する前に並んで待機している子ども達と話したり、声を掛けたりしています。競技入場前に整列している子ども達の相手をするという役目が与えられています。

学生はみな6年間の経験がありますから“小学校の運動会は良く分かっている”と最初は言います。「小学校の運動会? そんなものよく分かっている」と言います。ところがこの運動会の手伝いを終えた後、学生たちは共通してしみじみと言います。「よく分かっているはずだったが、実

は何も知らなかった」と笑いながら言うのです。「舞台裏で先生方がどれだけ苦労されていたか、何も知らなかった」と。つまり、小学生のときは運動会の表の部分しか見ていないので、運動会がどのように舞台裏で組み立てられ、その運営を先生方がどのように進めているのか、そういうことは一切、子どもの目からは分からなかったということです。運動会の「サービス・ラーニング」に行くことで、学校の大きな行事のひとつである運動会がどのようなものであるかがようやく分かったということ、これが小学校というものを理解する一歩になっていくのだと思います。調べてみれば「指導される子ども」の立場から「指導する教師」への意識転換の始まりであるということ。

左下に男子学生の2人が笑っている写真があります。どうして笑っているのかというと、カメラを向けられたから笑っているわけではありません。この写真の左の男子学生は運動会の前日の設営準備の時に、固い運動場に杭を打ってテントを設置しました。その杭を打つときに手にマメができ、その皮がつぶれてヒリヒリと痛いということでしたが、その手を見せて「こんなに手の皮がむけたのですよ」と言って笑っているのです。この笑いには意味があります。普通は痛いので笑い顔になりません。しかし彼は手の皮がむける経験をしたことによって、「新しい経験をした」「運動会が分かってきた」ということで喜んで笑っているのです。そして彼が笑っているのにつられて、隣の男子学生も笑っています。こういう笑いです。運動会の終了後に「実は何も知らなかった」と言って笑っているのです。このような「サービス・ラーニング」による経験学習で得た笑い顔が、キャンパスでの学習のモチベーションになってほしいし、なるに違いないと私たち教員は考えています。

6. インターンシップ

6. インターンシップ

(1) キャリア教育における「インターンシップ」の位置づけ

インターンシップは特定職業の就業体験。進路選択がおおよそ決まった時期に、その職業に一定期間、実際に従事して実務を経験することで、就職の直前準備をするのが本来の姿で、キャリア教育の最終段階である。指導される事項も実務の具体的な内容に関わり、進路選択の意志を再確認することも重なる。

(2) 高校生インターンシップの問題点

インターンシップは大学生の就活時におこなわれてきたが、近年は高校生のあいだでもしばしば見られるようになった。ただし、いくつかの問題点を指摘できる。

① キャリア教育の一環として、その目的が[A 広義]「人生、経歴、履歴」に関する具体的経験学習なのか、[B 狭義]「職業、専門職」に関する具体的経験学習なのか曖昧である。

② 換言すると、広く社会と関わる一歩としての「職場訪問」なのか、「特定職業の実務体験」なのか、目的が不明確である。

③ 生徒個人のキャリア発達段階を無視したまま、人手不足で早く若者を囲い込みたい企業の思惑に流されてしまうかのように実施されていないか。

④ 職業選択で一定の結論を出すことを、インターンシップ参加によって急ぐことになっていないか。青年期の職業選択は、あれこれと揺れ動くのが普通である。

(1) キャリア教育における「インターンシップ」の位置づけ

さて「サービス・ラーニング」が大学1年生だとすると、2年生から3年生、そして4年生に教育実習があり、最後に位置づくのが「インターンシップ」であると私は考えています。キャリア教育における「インターンシップ」の位置づけですが、特定職業の就業体験であり、進路選択がおおよそ決まった時期に、その職業に一定期間実際に従事して実務を経験することで就職直前

準備をするというのが本来の姿です。キャリア教育の最終段階であるといえると思います。指導される事項も実務の具体的な内容に関わるので、職業選択の意思を再確認することとも重なります。この「インターンシップ」は大学生中心に就職活動時に盛んに行われており、最近では高校での「インターンシップ」が見られるようになってきました。ただし、これには幾つかの問題点を感じています。4つほど挙げたいと思います。

(2) 高校生インターンシップの問題点

まずキャリア教育の一環として、その目的が広い意味での「人生、経歴、履歴」に関する具体的経験学習なのか、あるいは狭い意味として「職業、専門職」に関する具体的経験学習なのか、曖昧ではないかというのが1つ目の問題点です。2つ目の問題点は職場訪問の目的が、広く社会と関わる一歩としての一般的な「職場訪問」なのか、それとも「特定職業の実務体験」なのか、つまり、広く社会と関わる一歩という広い意味なのか、あるいはもっと狭い意味なのか、この目的がどうも明確ではない気がします。もちろん学校によって職場訪問のやり方は異なります。このあたりはさらに検討する必要があるのではないかと問題提起です。3つ目は、生徒個人のキャリア発達段階の特徴を無視したまま、人手不足で早く若者を囲い込みたいという企業の思惑に流されているかのように実施されていないかということです。最近では深刻な人手不足であり、特に中小企業は労働者を求めています。高校生たちに早く職場訪問してもらい、そこで“囲い込んでしまいたい”という思惑はないのでしょうか。キャリア教育の一環ではありますが、「これは」という人材がいれば「どう？うちの会社にこない？」といったような影の誘いもあるように聞いています。キャリア教育として高校生たちを対象に行ってもよいのでしょうか。高校生に対しては、もっと広い意味でのキャリア教育からスタートしていくべきであると感じているのが、3つ目の問題点です。それと重なりますが4つ目の問題点として、職業選択で一定の結論を出すことを「インターンシップ」への参加によって高校生が急ぐことになっていないだろうかということです。青年期の職業選択はあれこれと揺れ動くのが普通です。青年前期から青年後期にかけては非常に揺れ動く時期だということを前に触れましたが、進路選択、とくに具体的な職業選択はあれこれと揺れ動くのが普通です。にもかかわらず高校生の段階に「インターンシップ」を行うということは、揺れ動くことを良しとせず、「あまり揺れ動かないで、早く決めなさい」ということになっていないのでしょうか。それが今の産業界の人手不足の流れの中で押し流されているような傾向がもしあるとするならば、それは本来のキャリア教育ではないと思います。揺れ動く青少年の進路選択のプロセスに寄り添っていくことがキャリア教育の基本方針ではないのでしょうか。

7.大学4年間の成長発達に即した「参加」経験学習（教員養成の場合）

7. 大学4年間の成長発達に即した「参加」経験学習 （教員養成の場合）

(1) 青年期のキャリア発達を促す機会

〔高校〕 ボランティア

〔大学1・2年〕 サービス・ラーニング

〔大学3・4年〕 教育実習

〔大学4年〕 学校インターンシップ

社会との関わり

職業現場との関わり

<職業選択の模索>

特定職業の予備的就業経験

特定職業の直前就業経験

(2) 高校時の“あこがれ”や“夢”と職業の現実との乖離

高校時に職場訪問に行ったときや、幼い頃から接した指導者のイメージなどから、幼稚園や小学校の先生になりたいという“あこがれ”や“夢”を抱いて教育学部に入学する学生がかなりいる。しかし、教職の実際をまだ知らないために、現実にして職業志望を立て直す必要に迫られるケースがある。「サービス・ラーニング」や「教育実習」そして「学校インターンシップ」はその立て直しのてこになる大切な機会となる。

(1) 青年期のキャリア発達を促す機会

これまで「サービス・ラーニング」、そして「インターンシップ」について眺めてきましたので、“大学4年間の成長発達に即した「参加」経験学習”について改めてまとめてみます。私が所属している教育学部を念頭に置き、教員養成の場合に即しながら整理してみたいと思います。

青年期のキャリア発達を促す機会は、高校ではやはり「ボランティア」ではないでしょうか。ここで社会との関わりに踏み出します。最初はやや強制的な部分があるかと思いますが、高校の3年間で徐々に社会と関わっていく経験を「ボランティア」を通じて積み重ねていきます。そして大学1-2年生になったら「サービス・ラーニング」で職業現場との関わりに踏み出します。「サービス・ラーニング」を通じて職業選択を模索していきます。教育学部の場合は、この学部に入った時点で職業選択をしているはずなのですが、学生の実態をみると本当のところは選択できていないというケースがあります。つまり大学1年生の段階で「私の進路はこれではなかった」「幼稚園の先生になるのを止めます」とか、「小学校の先生になるのを止めます」ということがあるのです。「サービス・ラーニング」を通じて職業選択を模索することは非常に重要です。大学3-4年生になると教育実習があります。これは特定職業の予備的な就業経験となります。そして大学4年生で初めて「学校インターンシップ」が登場します。特定職業の直前就業経験で、もちろん教員採用試験に合格しなければいけません、その経験に基づいてすぐに教師になっていく準備が出来上がります。

(2) “あこがれ”や“夢”と職業の現実との乖離

ところが文部科学省の新しい教職課程では、大学1-4年生までの全学年に対する「学校インターンシップ」を重視しています。この言葉の使い方は少し荒っぽいと感じます。一番大切なことは大学1年生から4年生まで、どうやって青年後期の学生たちが成長発達していくかということだろうと思います。先ほど触れましたが「揺れ動き」によって、自分の将来の進路として教師を目指すことを止めるか否かということでもふたつくことがあります。この理由として比較的多いのが、高校時のあこがれや夢と職業の現実との乖離、ギャップです。高校での職場訪問や、幼いころから接した指導者のイメージなどから、幼稚園や小学校の先生になりたいというあこがれや

夢をいだいて教育学部に入学する学生がかなりいます。しかし教職の実際をまだ知らないために、現実に即して職業志望を立て直す必要に迫られるケースがあります。初期の「サービス・ラーニング」や半ばの「教育実習」、そして最後の「学校インターンシップ」はその立て直しのテコになる大切な機会になるのではないかと思います。繰り返しますが、進路選択で揺れ動くのは当たり前です。そのために私たちはその都度適切な機会を提供していく必要があります。それが「サービス・ラーニング」であり、「教育実習」であり、そして「学校インターンシップ」なのではないでしょうか。

8. キャリア教育にとって高大接続の課題

8. キャリア教育にとって高大接続の課題

- ①同じ「青年期」でありながら「前期」と「後期」が中高と大学という学校制度によって区分されてしまっているので、学生個人の発達過程に即して連続して捉える必要がある。
- ②「青年(前+後)期」の発達の特徴に即しながら、「社会参加」の目標に向かって、各人に適切な形態を提供するのがキャリア教育の目的と考える。
- ③早期から[B 狭義]「職業、専門職」にとられることなく、常に[A 広義]「人生、経歴、履歴」と対話しながら探究する。
- ④高校時の「ボランティア」から、大学初年次の「サービス・ラーニング」へと連続させるプログラムの開発が求められる。
- ⑤①～③のねらいに基づき、④のプログラム開発を実現するために、高校と大学の教員が共同研究プロジェクトを立ち上げ、研究会で検討することを提案したい。

ご静聴ありがとうございました

最後に「キャリア教育にとって高大接続の課題」を①-⑤にまとめました。まず①です。同じ「青年期」でありながら、「前期」と「後期」が中・高校と大学という学校制度によって区分されてしまっているため、個人の発達過程に即して連続してとらえる必要があるのではないのかということですね。学校制度から迫ると同時に、個人の発達の過程からも迫っていき、その両者を常に対話させていかないと高大接続にはならないだろうと思います。②は、青年前期、そして後期の発達の特徴に即しながら「社会参加」の目標に向かって、各人に適切な経験機会を提供するのがキャリア教育の目的だと考えており、こうした目的をさらに検討する必要があるということです。何度も強調しているとおり、キャリア教育の一番大きな目的は、社会参加の目標に向かって個人がさまざまな経験をしながら自分の進路を模索していくということです。どの職業にするのかといった狭すぎるとらえ方は、キャリア教育を矮小化していることにならないでしょうか。したがって③は、早期から狭い意味の「職業、専門職」にとられることなく、常に広い意味で「人生、経歴、履歴」と対話しながら探究する必要があるということです。④は、高校時の「ボランティア」から大学初年次の「サービス・ラーニング」へと連続させるプログラムの開発が求められているということです。高大接続では、ここがまだ十分に開拓されていないという気がします。ボランティアは高校のボランティア、そして大学1年のサービス・ラーニングはサービス・ラーニングということではなく「ボランティアからサービス・ラーニングへ」と連続させるプログラムが求められています。これは高校側と大学側が同じ席について協働して研究する必要があると思います。

そこで最後の⑤ですが、①から③までの狙いに基づき、④のプログラムの開発を実現するために、高校と大学の教員が共同研究プロジェクトを立ち上げ、研究会で検討することを是非提案したいと思います。